ウクライナ・キルケゴールカンファレンスに参加して

馬場　智理

2013年12月3日、ウクライナの首都キエフにおいて、キルケゴール生誕200年を記念した「キルケゴールカンファレンス」が開催され、日本からは、桝形公也先生と私が参加した。本稿では、その参加報告を記すことにする。

○本カンファレンスについて

「われわれの時代におけるキルケゴール：現代哲学と宗教研究における問題と展望」と題された本カンファレンスは、ウクライナ国立科学アカデミー・スコヴォロダ哲学研究所の主催で開かれた。同研究所は1946年に設立され、同国でも屈指の哲学系研究所である。研究分野は、科学哲学、倫理学、人間学、社会哲学、歴史哲学、ウクライナ哲学、外国哲学史、宗教学など多岐にわたり、全体で約100人ほどの研究者が所属している。今回のカンファレンスは、外国哲学史、宗教学分野による行事として企画された。

○発表の概要

事前に事務局より、キルケゴールと日本の哲学者・思想家との関係について発表して欲しいとの要請もあり、桝形先生は内村鑑三について、私は田辺元について、キルケゴールとの関連に関する発表を行った。以下、その概要を記する。

・内村鑑三とキルケゴール

桝形先生の発表では、特に内村の『余は如何にして基督信徒となりし乎（以下『余は～』と省略)』を中心テキストとしつつ、キルケゴールとの思想的な連関を探ることが目的とされた。

『余は～』は、1895年、『ある日本人回心者の日記』という題名でアメリカで出版された。出版直後はほどんど注目されることがなかったが、その後、ヨー

ロッパの各国語に翻訳されると、大きな反響を巻き起こした。翻訳者や翻訳書に接した者の中には、キリストの教えに出会い、福音に苦悩し、決定的な回心をする真摯な若者、また、内面的な苦悩に向きあわない教会への批判者として、内村とキルケゴールを重ね合わせる者もいた。

『余は〜』とキルケゴール思想とのあいだに見いだされる類似点としては、次の三点を指摘することができる。

第一点は、タイトルと仮名の使用である。『余は如何にして基督信徒となりし乎』というタイトルは、キルケゴールにおける「いかにしてキリスト者となるか」という宗教的課題を彷彿とさせる。また、日本で最初に出版した際は、読者の予断を避けるためにジョナサン・Xという仮名を用いている。これは、まさにキルケゴールの目的と共通している。

第二は、教会批判と、無教会運動である。内村がこうした宗教的態度を確立する一因として、札幌農学校時代に教えを受けたW・S・クラークの影響が挙げられる。出身地であるニューイングランドのピューリタニズムを反映し、聖書のみに基づき、誠実さ、愛、正義を現すキリスト教的紳士たることを求めるクラークの教えは、内村の精神的支柱となった。また、農学校卒業後に「札幌独立教会」を設立したり、アメリカに遊学した際には、キリスト教の宗派活動の弊害を経験する。こうしたことから、彼は「神ご自身の教えによらなければ、真の知識は得られない」と主張し、特定の教会に属さない活動や聖書のみによる信仰という、キルケゴールと類似するキリスト教観を固めていった。

第三は、キルケゴール的な諸々の表現である。同書の中には、「真理と理想」(真理は、それを生きることによってのみ知ることができる)、「救済と信仰」(神の魂が直接私の心に触れない限り、いかなる回心もあり得ない)、「おそれとおののき」(私はおそれとおののきをもって自らの祖国に向かうのだが、神がすでにご自身を私に示してくださっているので、いかなる悪を恐れることもない)といった、キルケゴールに通ずる記述を見いだすことができる。

また、内村とキルケゴールの思想的な接点については、武士道と敬虔主義の共通性という観点から考えることができる。農学校時代の内村がクラークから渡された宣誓書には、神に対する忠誠やキリスト者の義務に対する厳格な遵守

への求めが記されていた。他方でそうした誠実さは、武士道の重要な概念でもある。（内村は武士の家に生まれ、幼い頃は儒教などの武家教育を受けており、日本的精神の素養も持っている。）内村は、それらの概念のうちに相互犠牲的な愛のあり方を捉え、キリスト教的精神との共通性を見いだす。そして、「武士道に移植されたキリスト教は、もっともすばらしい世界の所産であろう」と述べる。

これらの概念をめぐって、内村が著作で直接キルケゴールに触れているわけではない。だが、内村が影響を受けたアメリカピューリタニズムがモラヴィア兄弟団をルーツのひとつとしていること、他方で、キルケゴールの父ミカエルがコペンハーゲンにおける同組織のメンバーであったこともあり、キルケゴールの思想的ルーツにもピューリタニズムがあること、このような共通性から、両者の連関を見通すことができるだろう。

・田辺元とキルケゴール

私の発表は、田辺元とキルケゴールの思想的関係について、「非合理性（absurdity）」という観点から分析を行った。キルケゴールにおいて、非合理性は絶対者と実存的人間との関係の特徴を表す。永遠で無限なる絶対者が時間的、有限的世界へと現れる運動は、実存的人間にとって、合理的に理解できない非合理な出来事である。そのため、絶対者との関係は信じられるしかない。合理的な理解の及ばないこの非合理性は、田辺哲学においても重要な役割を果たしている。特に合理的な世界理解を目指したいわゆる「種の論理」が挫折する第二次大戦後、彼は、現実世界の非合理性を前提として自らの思想を再構築する。そして、その過程でキルケゴールの思想を受容し、高い評価を与えている。

戦後の田辺は、自らの思想的無力を現実世界の合理的理解の限界にまで展開し、『懺悔道としての哲学』として結実させる。それは、合理的思考が現実との間で必然的に引き起こす矛盾を、絶対無のはたらきとして捉え直すことをとおして克服することを目指す。それを可能とするためには、合理的思考を断念する自己否定を契機として、自己を絶対無との非合理な関係において受け取り直すことが重要であると主張する。田辺は、懺悔道の基本構造を親鸞の浄土真宗から援用する一方、現実世界に生きる人間存在に関しては、キルケゴールの

実存理解と共通した存在構造を用いる。

そのため田辺は、『実存と愛と実践』において、キルケゴールの思想を詳細に検討する。その中で、彼のキルケゴールに対する関心は、主として「実存」概念に向けられる。近代哲学は、人間を抽象的、一般的、匿名的にしか説明できないのに対し、実存は、人間の現実的な、個人としての、自己としてのあり方を指す。これらは、自己否定を契機とした絶対者との関係を課題とする現実の人間を理解するための、重要な観点である。田辺は、非合理性を引き受けつつ、現実世界に生きるそのような人間のあり方を捉えようとするキルケゴールの姿勢を高く評価する。

ただし、両者の間には、決定的な違いがあることも見逃されてはならない。それは、絶対的存在の理解である。キルケゴールにとっての絶対的存在は、いうまでもなくキリスト教の神である。他方、田辺の場合は絶対無であり、その理解は特定の宗教や主義に依拠しない。実際、彼は後年、絶対無の展開としてのキリスト教、仏教、マルクス主義の統合を試みる。したがって、キルケゴールにおける実存的課題が、キリスト教の神との非合理な関係をめぐって生起しているとすれば、田辺の絶対無においては、この神を前にした実存の内面的問題が骨抜きにされかねない。田辺は、キルケゴール思想が個人の問題に終始し社会性が欠如していると批判するが、キルケゴールの立場からすると、そうした批判は神と実存との非合理な関係の「厳しさ」を捉えきれていないことの裏返しであるともいえる。

田辺のキルケゴール読解がはらむ問題は、ただ彼個人に関わるだけではなく、日本人がいかにキルケゴール読むかという課題とつながっている。キリスト教を基盤としない文化においては、キルケゴール思想の概念は慎重に検討される必要がある。しかし、そうした文化的なギャップは、異文化におけるキルケゴールの意義を低下させるものではない。合理的な世界理解がさまざまな面で破綻を来している現代の日本において、非合理な現実をどのように捉えるかという問いをめぐって展開されるキルケゴールや田辺の主張は、今なお重要な示唆をわれわれに与える。

○カンファレンスに参加して

発表後の質疑では、やはり、キリスト教を主要な文化的基盤として持たない日本においてキルケゴールが読まれるのはなぜか、という点に質問が集まった。哲学者個人の関心については一通りの説明をしたが、彼らが知りたいところの日本人一般の問題については、うまく答えることができなかった。キルケゴールの真意をとらえきれているかという点も含め、キルケゴールを読む上で、「日本人として」という条件を避けて通れないことを意識させられた。

また、本カンファレンスには多くの研究者が招待されていたが、実際に参加したのは、日本からの二人のみであった。どのような事情があったのかは不明であるが、仮に世界におけるキルケゴール研究のプレゼンスが影響しているとすれば、われわれの研究も世界的な視野をもって進めることが重要であることを改めて感じた。

このように、今回のカンファレンスでは、いろいろと今後の研究の示唆を得ることができた。その他にも、ちょうどキエフ滞在時にEU加盟をめぐるデモが発生し、ヨーロッパの西と東の境界に位置する国家の現在を体感したり、チェルノブイリ原発やその周囲の廃墟となった町を巡るツアーに参加し、原発事故の現実を経験することができ、非常に充実したウクライナ行であった。